

笠置山懷古（榛葉竹庭）
かさぎやまかいこ
（しんばちくてい）

主上鴻猷萬事非 大寰何處寄龍
笠山終古傷心地 松露猶霑客子衣

主上の鴻猷萬事非なり
しゅじょう こうゆう ばんじ ひ

大寰何處にか龍旗を寄せん
たいかん いずこ りゆうき よ

笠山終古傷心地
りゅうざん しゅうこ しょうしん ち

松露猶霑客子の衣
しょうろ なお うるお かくし ころも

解説 元弘元年（一二三二）討幕の皇図が事前に漏れ、

後醍醐天皇は先ず南都へ、続いて要害の地、笠置に難を避けられた。然し幕府軍は大挙してこれを包囲し、一ヶ月の攻防の後笠置が陥落するに及んで、天皇は藤原藤房らと共にこの地を脱出されたが、山城の有王山中で捕えられ、翌年隱岐島に配流となった。

語釈 ※鴻猷Ⅱ大きなはかりごと。 ※大寰Ⅱ天下。

※龍旗Ⅱ天子の旗。 ※客子Ⅱ旅人。

通釈 天皇の討幕計画は総て空しく、何処に錦旗を寄せるべきか、天下にその場所さえも失われてしまった。笠置山は千秋万古人の心を傷ましめる処であり、今も猶、松露が旅人の衣を霜すのである。